藝濃無精
鬼夢色の彦藏
芳町藝妓
兒雷也の鐘吉
きちひたぎらろ糸のくりから
勢肌彩俱利伽羅初編
下之巻
一番

梅堂國政畫
亀遊堂壽梓
中之巻
四

A514

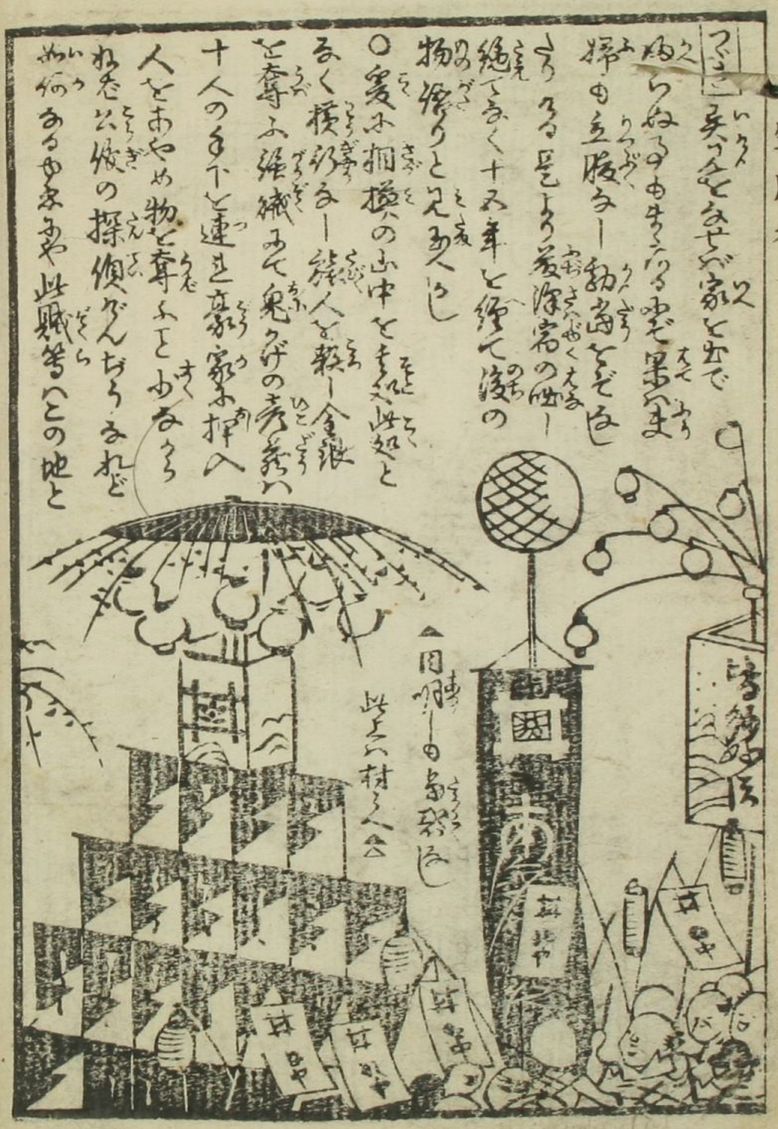
48-8294

つゞき
心若の
金ちんや
夢る
北病の
若くす
叩いたて
氷
乳房抓く
初あが泣出す
不若痛を悪び中ちあげて
姫よ中ちの不運の若るで生
病ると生涯不毎の若衆の人とあり我家ふ
幸ひ
慶

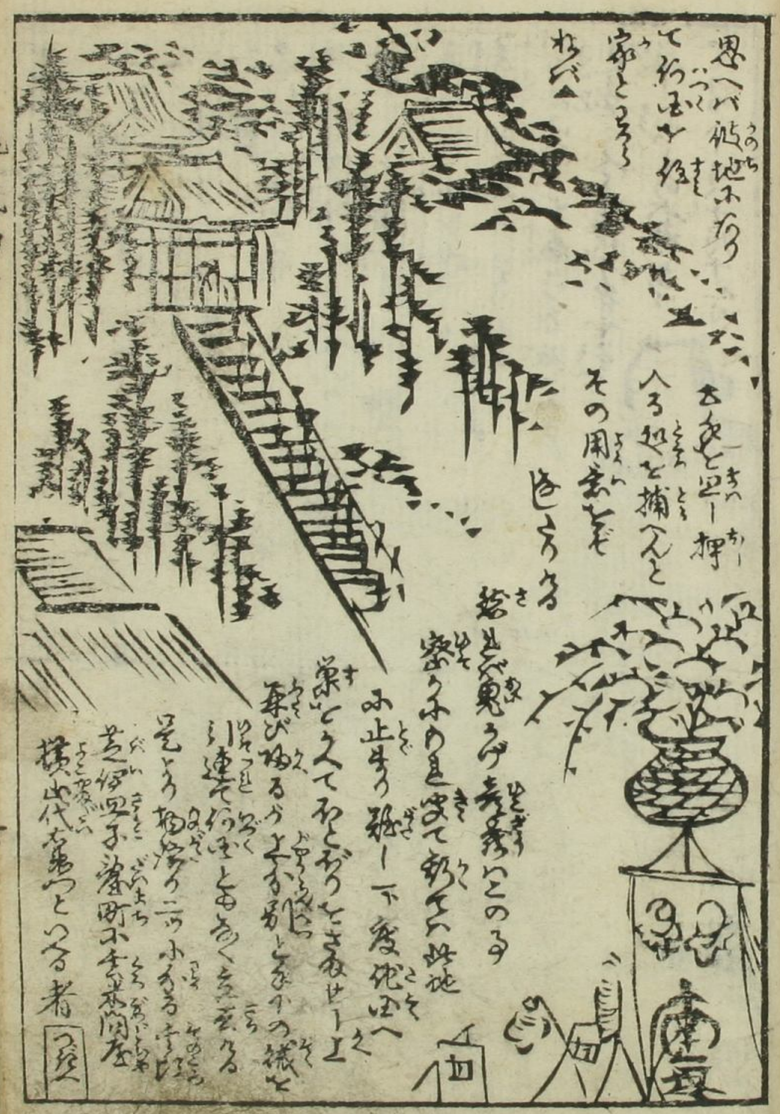
有る内を若ふ不孝のこと
枕ていけ七月
臣蛍病と引ぜ
中ふ
わも
ゆ
ま
そちと
乳
涙

つき
優婦の
あの人
妻
遠国
あと
雲

つゝこと
矢うなとなせば家と出で
ぬらぬるゆゆきてるる雲墨ふまま
掃ゆ立腹みー動尚をそ色
うろる見ようる愛深宮の西ー
絶てあく十五年と絶て後の
物語りとえ五人色し
○実ホ相模の山中をまれ此辺と
るく横死みー結人と教ー金銀
と奪ふ絶絹みて鬼ケ谷の考察ハ
十人の手下と連立豪家ふ押へ
人をあやめ物と奪ふとあるう
れ悪公俊の探偵ぐんちうみれど
物のあるあるあや此賊等へこの地と



思へば彼地ふたう
て行ふ仕ー絶
家とうう
わ人ハ



五人と出ー押
へる辺を捕へんと
その用意とぞ
色うる
絶ふ鬼ふみ考ふこのる
密ふふりと出て彼ふ此地
み止まう孤ー下後他出へ
巣とえて和とぎうとさあせー上
巣びねるうよかるとかの様と
引連て行ふとあるく立云る
見とう相ぎう二ツ小ふる手ー
芝伊四子業所ホ手業関左
横山代右衛門とつる者

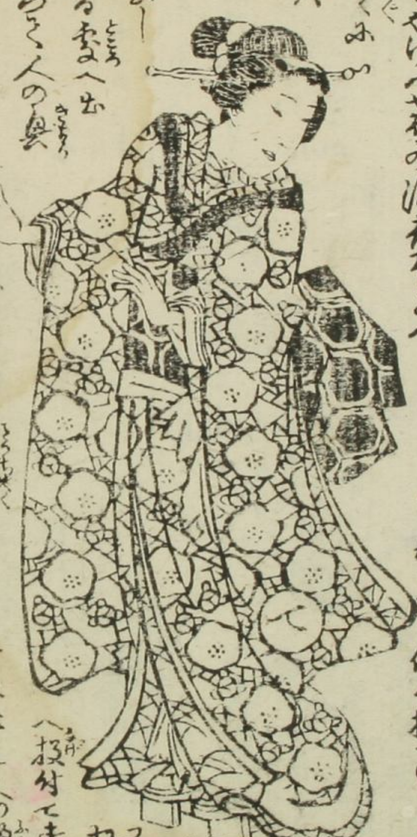
日蓮大菩薩
春
代

御休憩
青
て
ふ

つゞき
清
松
舟
代

つゞき

為人ぶり好ぐーと二人の浪の
色をうりて引立ちんと色ふか毋い
繁ちたーや者りさあぐと飛食ど少
減ねば人為てそだある代ち帝既ふ
ちのうさてやけべざ者の清者てと人
いなで偽くふ
飛食ハ
二人の
者ハ
立後ゑ
入らざる者へ出
者やうさて人の奥
と形げ者ん



☆言清者ゞ飛撫らんと者ん処と
お浦ハ大ろーと跳上る方と投ふる
ける清者ちうさね帰次者とりふる
ちんと者ん者ふと者ふりと清ふ
うかさて偽人投つける者ハ
久ふる
者ハ方ハ
果人も
撫撫
知んで者
へ投分て者ふと者ふる

☆ぶいけめと手掛者ふて人る

☆一人の為人

中の巻へ

010190517522

法
凡
例
目

壱

梅堂國政畫
中之巻
亀遊堂壽梓

A514
2

年へ
二八

とも
思ふ
狼の
働に不
恩者
どもへ

いく
恩を再び
掛らんかもあく
凡ホホの業の義るべく▲

南無妙法蓮華經

▲皆そくと
逃失せろ
狼へ仰と
足速くて
方へ行んとなる
のくくへ呼歩
救いを一
大悲の礼を
述べ狼へ
扶授ヒこふ長居を

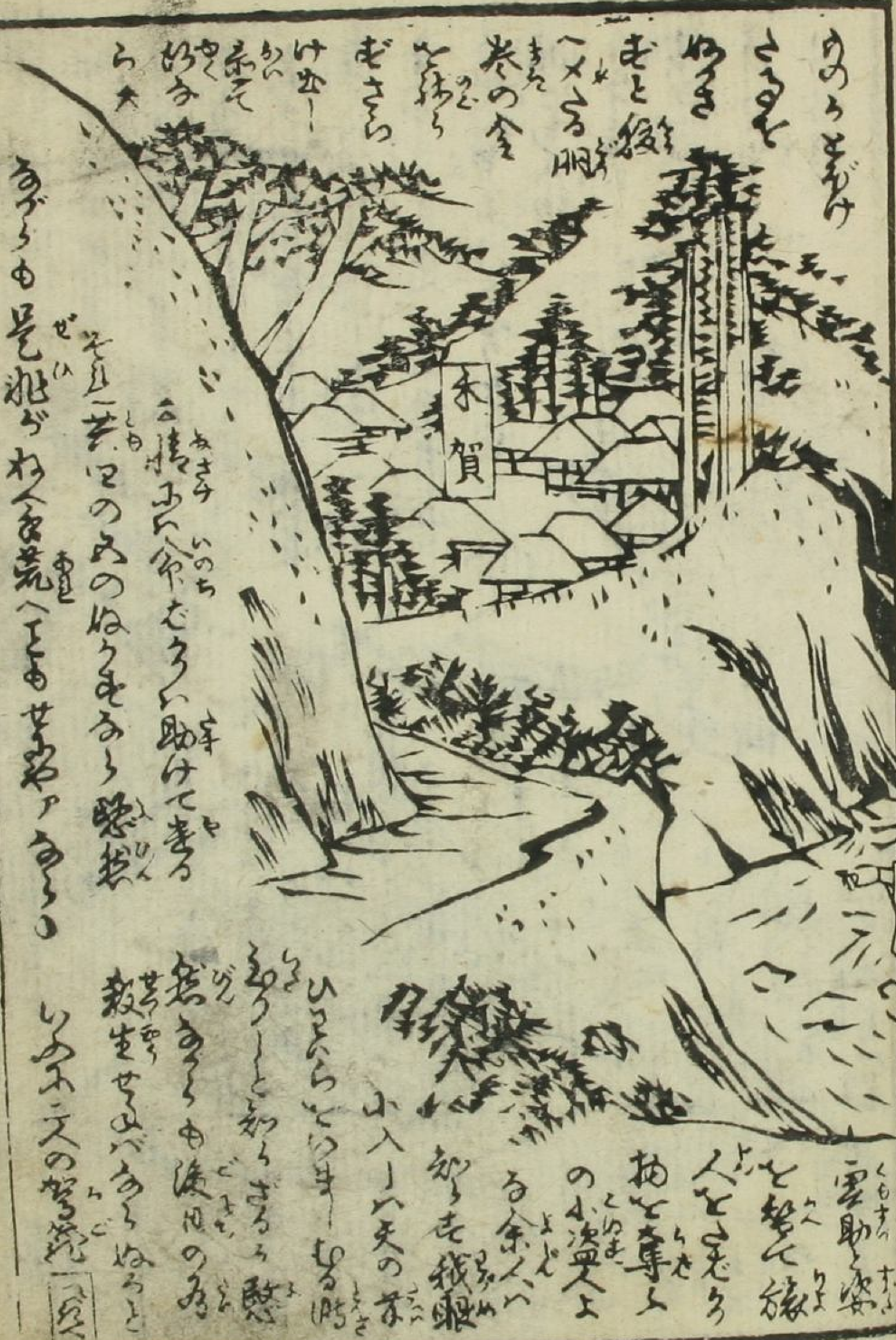
△みさまこそ
悪者共が再び
来へ行ある
アをあもやせん早く
逃めんと
狼へ礼とくと
恨と
中誦

248-8295

松
船

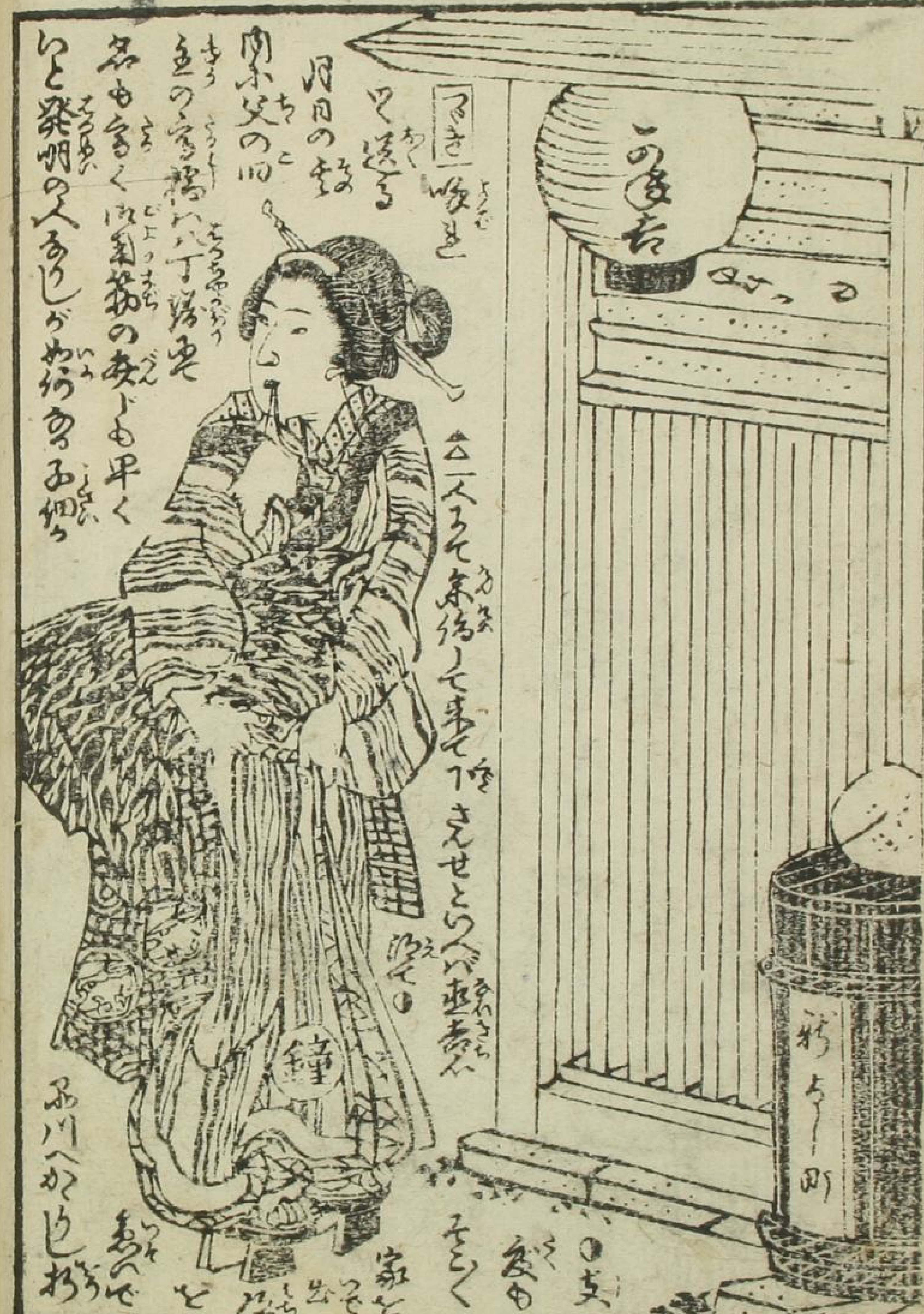
代
衛
義

つぎき
くだあげ見る
西の海原を
二ッ三
一ッの
返き



水賀
雲助が

つぎ舟へむかふ
切付
正



つゞき
噂を
ぞ送る
月日の立
間に父の回
忌の家橋は八丁堀宅
名も高く吟味物の役ども早く
いと発明の人なりしが如何なる子細か

△一人ゐて気病して来て下さんせとらへバ澄吉ハ
泣て
亦川へかくし置ける
あつて
と
そゝくさ
家を出
去る
○夫
安心

ちい吉橋ハ御家人浪人形ちなりしと聞て驚く
澄吉が父田所赤沼某ニ斬く
なぞ家名を問ひバそれと
文と捷ちならがバ
膝の上へおろぞと様子の
ゐを痛わしが此吉がかれ娘の吟く
剛情の大降ハ己を殺せと叫ぶバ旦那の仇
お恙なく一日も早く吟宅を行るの剣
ハたす迄じと言ふ澄吉ろぎにくゝん不安
の約束の身ぞ今の世の中も恐ろしいがね
公儀の御紋で身人せざる神の罰と云
後に何をとも自分の身と行ゐ身の
此主の吟身を殺さんと思ふ身の親亡△

吉ぞ浪ゐが～お見ゐけにと
気澄吉立止まり
私しあなたと
まで
拝みなん私しゐ
一ヶ月ぞ御の
組縁さるを今日
ハ如何なく八丁堀
より豊田屋さんの
鉛木身父さん今日ハ

✕ふり向バ
見方の男ハ
膝とぞ
わるさや
ゐをしや
八丁堀の
つゞく

相撲樓
若
直

五

直

010190517530

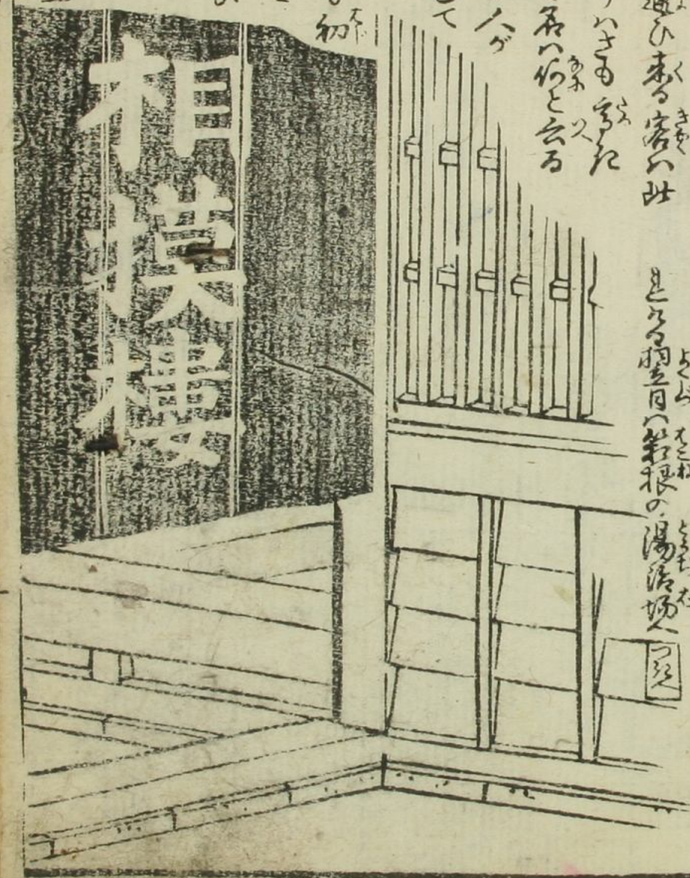
か

一番
下之巻
藤澤無籍
鬼鹿毛の彦藏
芳町藝妓
兒雷也の鐘吉
勢肌彩俱利伽羅初編

M51K
3

▲こせやゲて夫婦と約束も湯の中とゞ知ら
とる間五百八銭根の湯浴場へ

扨て又相撲屋の拉女おきの伴へ
去年の秋より通ひ来る客八此
銭をちこもふりいさも客れ
小栗廻り客ふりて名いかと云る
ゥ初ゝ銭どゝ八が
隅長とのゝ仲色て
殺ふ者の表り
るさゝばおぞも初
めゝう悪くゝさ
名ひゝう今ゝ五ひ
ふんの風ゝけて
結ふの銭ゝけ
拉ゝひゝゝ二廿

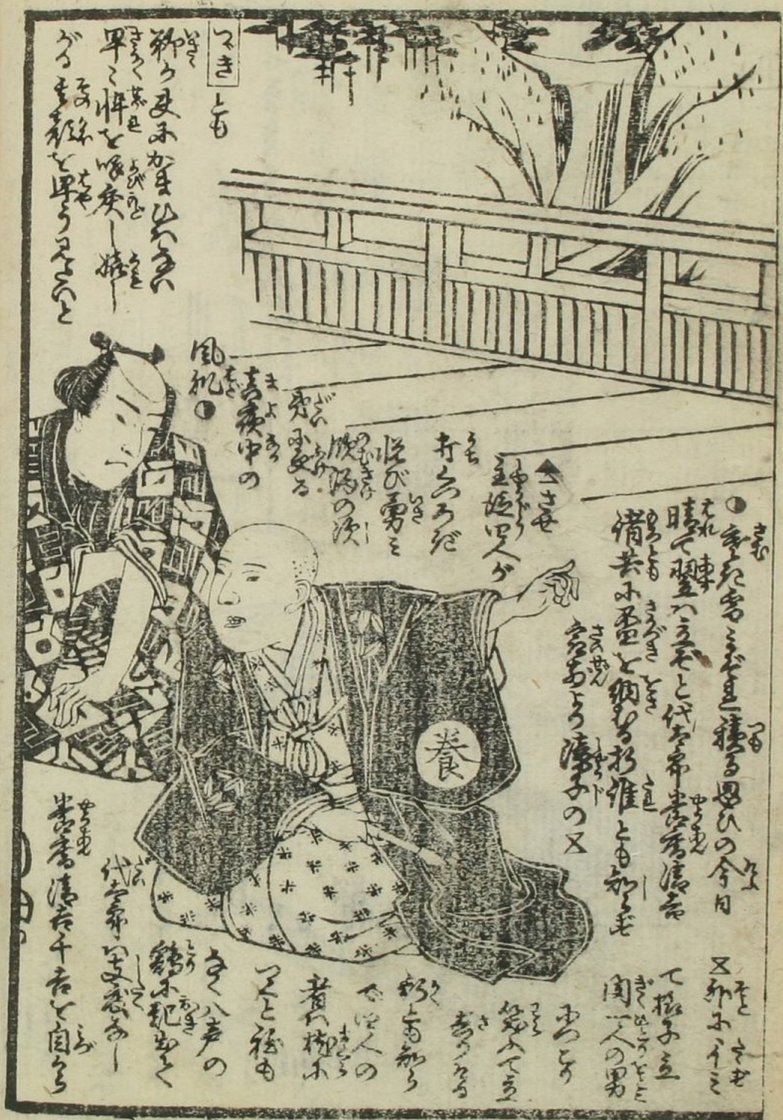


<48-8296>

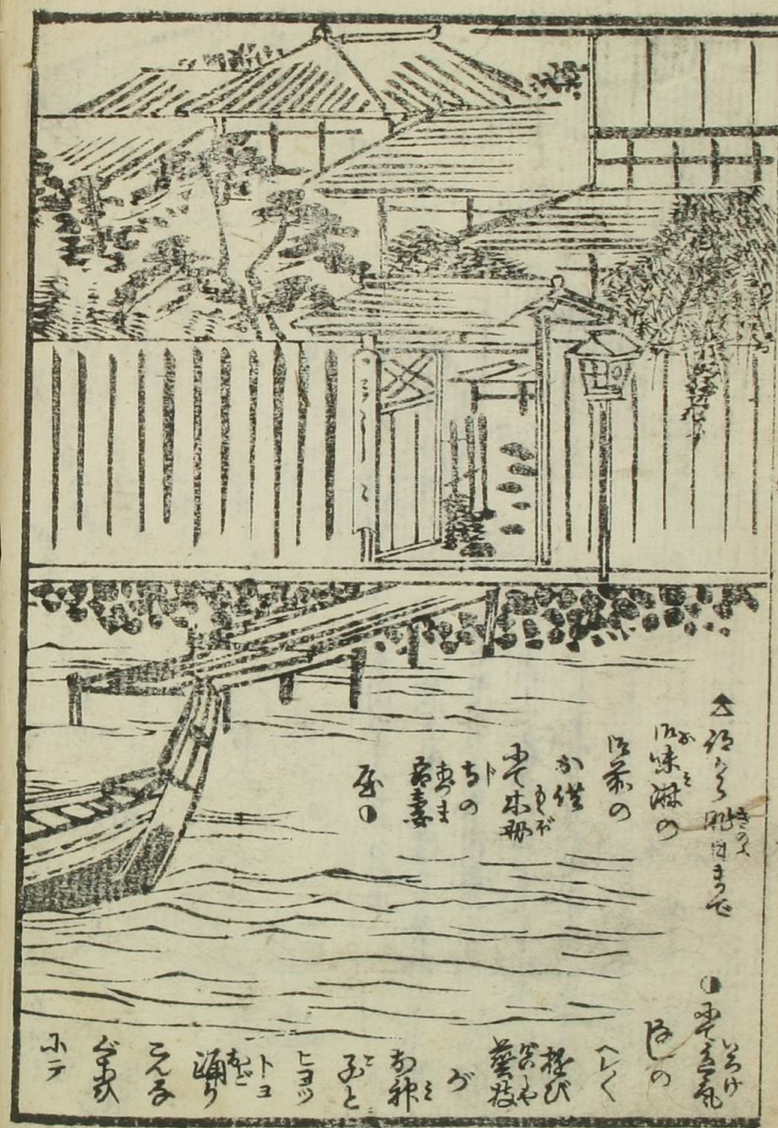
つゞき 扨もえびおそろの素性ふ出る
なをべ扨撰屋花今日も役ひの
ぶんあそ大工を撰び小鹿組の大一座芸妓
これも元来の彼ひも次第ふ交て太ゞ引
すべ色々発で諸事入込んでが瀬戸の
松平が会合ハ寄り納涼の客
ありとて部屋へ入ざるのを
あらまぜ酒の座敷ハ云も
さらなり下座も賑ふなりと
せねばんの座ふ登りと
発し悦び女の子る
まひるな賑はして
後らせんと勝し
石等ふ居る居しがおよひ

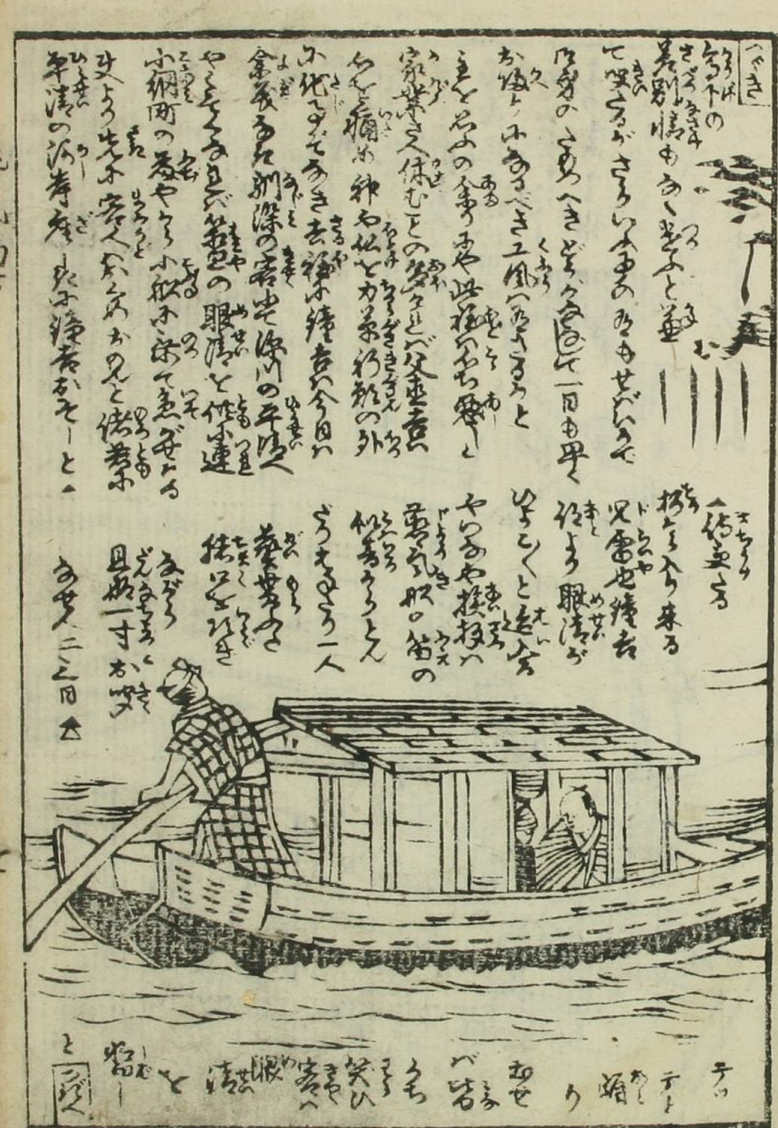
つれしろ山のりれんをせたかし
て子供を呼茶屋ふ至と
私ある子供ふ入さん
云事坊よ今吉介らんの
部屋ふ居るおの客人の
宗匠ハ何処でありしうひ
老いさりそちハ敷つ
居るゝやとやさしく問
是そかんぜうたての様な
何もあくあまさおの
らんの大るやお客
浮世子座町で居るハ
横山とかの米問屋
の番頭さん 「つぎへ」

松


養

清
代





つゞき

止め、雲霧もあり酒
らまでもあと答ともやうな
らあのかー産つて吹が
いつとうちまと食ひ
風げのに、考り村あの浪月ホ
雲の手なりど疫の更ぬ間
ちるへかと乳ホス一口吸也
さんと紙とあつ人ゆらんとゆホ
縁言宮ホ初ひ異紙
へ也ひらら
気りまくう潜
のるむひとと
帶ものて表の方
出ゆく浪ろホ眼時ハつるもん

鐘

せい

ゆくと寄ると縁者ゆなる者へ
皆ゆと時乃ふむ出紙
なる筆でゆるくうと

△是も平めそゆ縁ホ
女の乃のえうま縁べ
傘とホ持ちを出
持て縁つくゆといもひ
ゆくゆのの縁ホ
たゆろ嬉中浪へ来ろる
ゆ紙ホ清の二人の男縁
△寄合相女
平くゆろう
紙ゆと橋
ひろ乃渡辺人
多ゆて見るホ渡まの
ふゆホのつまゆてゆるホ
見ゆ乃ゆきうとの者へと
ゆて光芒ろ浪ろホ
ゆあの表紙そうへ
さゆドゆ滝止ゆホ
驚ゆなうら

010190517549

川上鼠邊編輯　梅堂國政画

二代目 歌川國貞 画
梅堂國政 編輯